

FOCUS Next

整形外科を中心に救急医療と リハビリテーションに注力



松本 慶政 先生 医療法人社団松友会 松本外科病院 理事長・院長(左)

久保 雄嗣 氏 医療法人社団松友会 松本外科病院 事務長(右)

(山口県防府市)

2023年10月に松本慶政先生が3代目院長に就任した松本外科病院。目標に掲げる「安心して治療を受けられる病院づくり」に向け、救急科専門医を常勤医師として迎え入れ、リハビリテーションスタッフの大幅な増員や地域連携室の拡充を図るなど、同院はこの1年で大きな歩みを進めています。

年間200例超の骨折手術と “極力断らない”救急医療

基本に忠実な手術と術後の骨折予防

松本外科病院は、松本先生の祖父が1954年に開業しました。当初は一般外科を中心に診療を行い、松本先生の父親の代からは整形外科に重点を置き、地域に密着した医療を提供してきました。現在は整形外科と形成外科を中心に、内科や脳神経外科の外来診療も行っています。

松本先生は、「防府市内で入院設備を有する整形外科の病院は限られます。当院の強みは手術が可能である点です」と語ります。同院では特に骨折手術が多く、年間200～250件を数えます。変形性膝関節症に対する人工関節置換術も年間10例ほど実施しており、骨折を含めた手術の多くを松本先生が執刀しています。「標準的な治療から逸脱しないこと、基本に忠実な手術を心掛けています」と話します。

術後の骨折予防にも注力しています。「高齢の骨折患者は必ず骨密度を測定し、骨の強度を確認しています」と松本先生。骨粗鬆症と診断した場合は速やかに投薬を開始します。また、骨折前は自立歩行が可能であった人でも杖の使用を勧めたり、転倒の予防につながる歩き方を助言したりするなど、「薬だけでなく、生活指導も欠かせません」と強調します。

迅速な検査と初期治療を心掛ける

防府市の一次、二次救急を担当する救急輪番病院の役割も担う同院は、2024年4月に救急科専門医を新たに迎え入れ、救急医療のさらなる強化を図っています。救急隊が同院の特徴を理解していることもあり、搬送される患者さんの

大半は骨折や外傷が占めているとのこと。

一方で、救急隊が当番病院を優先して受け入れを打診する関係上、専門外の患者さんが搬送されてくることも少なくありません。このような現状に触れつつ、松本先生は同院の救急医療における信条として、「極力断らない」「迅速な検査と初期治療」を挙げます。

「当院では、救急医療で求められる全ての医療を提供できるわけではありません。しかし、例えば患者さんを救急車に乗せたまま受け入れ先を探している状況であるなら、迷わず受け入れます。バイタルサインの確認やCT検査などを行い、可能な限りの初期治療を行います。その上で対応可能な病院に引き継げば、到着後に一から検査を行う必要がなく、速やかに治療を開始することが可能です」

同院では、2023年度に863台の救急車を受け入れました。そのうち約40台は、近隣で受け入れ先を見つけることができなかった他自治体からの搬送だったと松本先生は言います。

リハビリテーションと介護施設との連携

実生活をイメージしたリハビリを提供

現在、同院には8人のリハビリスタッフ（理学療法士5人、作業療法士2人、マッサージ師1人）が在籍しています。このうち4人は、松本先生が院長に就任した後に採用したスタッフです。「手術が成功しても、リハビリが適切に行われなければ、良好な経過は期待できません」と大幅に増員した理由を説明します。

同院のリハビリの特徴は、生活動線、段差や階段の有無など患者さんの自宅の環境を丁寧に聞き取り、退院後の生活を

イメージしながら行う点にあります。事務長の久保雄嗣氏は、「実生活に即したリハビリでなければ、自宅に戻られた後の生活に支障を来すばかりか、最悪の場合、転倒、骨折による再入院につながりかねません」と言います。

リハビリ室での標準的なリハビリに加え、患者さんのADLに合わせて、院内の廊下での歩行訓練や階段昇降なども行っています。もともと自立歩行が可能だった患者さんであれば、歩行器を使った屋外歩行訓練なども実施するそうです。「病棟の平らな廊下と凹凸のあるアスファルトの路面では、歩行時の感覚が全く異なります」と久保氏は説明します。

作業療法士を2人に増員したこともあり、久保氏は提供するリハビリの幅をさらに広げたいとの意向を示します。「退院後の生活に少しでも早く馴染めるように、今後は病院の近隣にあるスーパーマーケットへの買い物訓練なども取り入れていきたいと考えています」。

協力医療機関として、介護施設に安心感を

2024年5月、新たに在宅医療の経験が豊富な職員を採用し、地域連携室のスタッフを5人に増員しました。松本先生は、連携室が主導した最近の主な取り組みとして、10月までの約半年間で近隣の介護施設9施設と協力医療機関の契約を締結したことを挙げます。退院後に施設に戻った患者さんの外来でのフォローアップや、施設入居者に異変が生じた際の緊急対応などが協力医療機関としての同院の役割です。

「当院と近隣の施設はこれまでは十分なコミュニケーションが取れているとは言い難い状況でした。ですが、協力医療機関の契約を結んで以降は、例えば施設からの入院患者さんに関しては、リハビリの状況や退院の見込み時期などについて密に連絡を取り合っています。施設側からは、受け入れの準備がしやすくなったといった声をいただいています」

さらに松本先生は、「よほどのことがない限り、連携施設からの問い合わせは断らないというスタンスを当直医の間で共有しています」と続けます。こうした協力医療機関としての取り組みは、施設側の安心感にもつながっているようです。

おいしい食事で、気持ちを前向きに

食のこだわりも同院の特徴です。同院では入院患者の食事を外部委託せず、朝昼晩の3食とも院内の厨房で調理しています。料理の一部に病院の畑で育てた有機野菜や地元産の食材を使用しており、患者さんからも好評を得ています。

「入院期間の長い患者さんは、何日も、時には何週間もの間、

痛みや辛さを抱えて過ごすことになります。その中で食事は数少ない楽しみの一つです。口に合うか合わないかは非常に重要で、治療やリハビリに前向きに取り組む上で、おいしい食事はプラスになると思うのです」

食を重視する背景にある思いをこう語った松本先生。同院の今後の運営方針については、「常日頃、考えているのは、患者さんが安心して前向きに治療やリハビリに取り組める病院づくりです」と話します。院長就任からの1年で積極的に医師やスタッフを増やし、救急医療やリハビリ、介護施設との連携の拡充を図ってきました。その上で、整形外科の患者さんは高齢で基礎疾患を抱えている人が多いことに触れ、「今後は内科も充実させたい」と意欲を示します。「この1年で大きく変わりましたが、まだ変わっている途中です」。より広く地域に貢献していくための同院の取り組みは、始まったばかりです。



リハビリの一環で、希望する患者さんには専門スタッフによるマッサージも行っています。「とても好評です」と松本先生。



長い距離を歩ける、あるいは歩きたいとの希望がある場合は、病棟の廊下を使って歩行訓練を行っています。

POINT

- ・「極力断らない」「迅速な初期治療」を信条に、地域の一次・二次救急を担う。
- ・スタッフを大幅に増員し、患者さんの実生活に即したリハビリテーションを提供。
- ・介護施設との連携を強化し、協力医療機関として施設入所者の健康を支える。